

フランス語の間投詞 bof について

山 本 大 地

1. はじめに

言語に現れる主観性をめぐる研究の一環として、本稿ではフランス語の bof という表現を取り上げる。一般には間投詞とみなされ、くだけた場面では頻繁に使用される。Le Grand Robert による記述、および Frantext を用いた筆者自身の調査によると、bof の初出は 1963 年頃とみられ、比較的新しい表現であると言える。

フランス語学の中で、間投詞が取り上げられること自体比較的少ないが、bof に関しては筆者の知る限り、扱った論文は存在しない。本稿では用例を収集し、そこに現れる bof の意味・用法を記述することを主たる目的とする。

2. 辞書類による bof の意味記述

まず、この間投詞が一般にどのように記述されているのかを把握するため、辞書類による bof の意味記述を概観する。すでに述べたように先行研究が存在しないので、学習辞書を含め、参照可能な辞書は概ね調べた。

まずは学習辞書を見てみよう。クラウン仏和辞典とプチロワイヤル仏和辞典は、bof を間投詞に分類し、訳語として「ちえっ、ふん」を挙げ、「軽蔑・無関心」と記述している。例文は挙がっていない。2011年に出版されたロベール・クレ仏和辞典も、クラウン、プチロワイヤルとほぼ同じ説明だが、例文が挙がっている。

- (1) Bof ! Ce n'est même pas la peine d'essayer !
「ふん！わざわざやってみるまでもないよ！」
- (2) Tu ne veux pas goûter ce gâteau ? - Bof !
「このケーキ食べたくないの？ - 別に！」

ルディコに関しても、説明はほぼ同様だが、特殊な表現である bof génération [génération bof] 「しらけの世代」が例に挙がっている。これは、アメリカのジェネレーション X に相当し、1960 年代初めから 1970 年代頃に生まれた無気力な若者世代を指した言葉である。間投詞としての用法ではないが、bof という言葉が無関心を象徴する言葉であることが理解できる。

仏和辞書としては最後に、小学館ロベール仏和大辞典を見てみよう。この辞書では「無関心、軽蔑、懷疑」と

説明されており、唯一「懷疑」という言葉がみられる。また訳語も「まあね、おやおや」となっており、他の辞書とはかなり異なっている。例文も挙げておく。

- (3) Alors, ton voyage en France ? - Bof ! Tu sais, la France, c'est sans surprise.
「で、フランス旅行はどうだった」「どうってことはない。フランスに目新しいことなんかありゃしない」
- (4) Ca te changera un peu les idées.
「ちょっとは気分転換になるんじゃない」
Bof !
「まあね（大して変わらないだろう）」

続いて仏仏辞書でもわずかに言及されているので簡単に触れておく。Le Trésor de la langue française informatisé 及び Le Grand Larousse de la langue française には見出しが存在しないが、Le Grand Robert de la langue française には「Interjection exprimant le mépris, la lassitude, l'indifférence.」 「軽蔑、無気力、無関心を表す間投詞」とあり、次の例が挙がっている。

- (5) « Bof ! Vivre à l'heure atomique, c'est savoir au fond de soi, que tout peut arriver chaque jour »
- (6) - Autrement dit tu ne trouves pas ça formidable.
- Bof ! Il est bon quand même ton truc. Donne-le, il passera.
- (7) Pendant le déjeuner, je l'ai laissé me prendre la main. Bôf (sic), qu'est-ce que c'est, une main ?

以上のように、仏和辞書も仏仏辞書も記述に大差はなく、おおむね「軽蔑、無気力、無関心といった話し手の態度を表す間投詞」という点で一致しているといえる。このようにまとめると一見、論じる必要のない単純な表現であるように見える。しかしながら、用例を集めて観察すると、いくつかの新しい事実を指摘できる。

そこで本稿の主張を明らかにしておきたい。大きく二点に分けることができる。

ひとつは間投詞という文法カテゴリーに関係する。辞書で bof が一律に間投詞に分類されているのを見た。事実、bof が間投詞の用法をもつことに疑いの余地はないが、その一方で間投詞というよりも形容詞的というべき用法ももち合わせているように思える。本稿では、それ

ぞれ「間投詞的用法」「形容詞的用法」と呼び、この二つの用法を区別することを提案する。

もうひとつの主張は間投詞的な用法に関わる。辞書に記載されている間投詞的な使用に限っても、「軽蔑、無気力、無関心」に留まらない用法の広がりが見られ、辞書の記述は十分でないように思われる。

以下ではまず間投詞的用法、そして形容詞的用法を記述する。

3. bof の用法

3.1. 間投詞的用法

間投詞的用法はその意味価値が多様であるため、さらに下位分類する。しかしこの分類は現時点で用例を整理するために便宜的に行ったものであり、今後さらに改善の余地がある。また用例をさらに集めることで新たな用法を指摘できる可能性もあり、以下の用法ですべての用法を網羅しているわけではない。

3.1.1. あいまいな返事

(8) - Tu as envie de venir avec moi courir quelques kilomètres ?

「何キロか一緒にジョギングに行きたくない？」

- Bof !

「別に」

- Je pars dans cinq minutes. Si tu te décides, pas de problème, je serai dans la cour. (Pourquoi)

「五分後に出るわ。決心したら、いいわよ、庭にいるから。」

この例の bof は、辞書に挙がっている例と同タイプの用法である。辞書には「無関心」という意味が記載されていたが、確かにこの bof という返事から、話し手がジョギングに行くことにあまり興味をもっていないことがうかがえる。しかし、bof の特徴を記述するうえでより重要に思われる点は、行くとも言わないが完全には断りもしない、あいまいなところにある。これは non という返事と比べるとよくわかる。同じように無関心な態度を表していても、non は完全な拒否であるが、bof はそこまで拒否していない。だからこそ、対話者も Si tu te décides「決心したら」と述べているのである。この例の bof はおおそ mouais という表現で言い換えることができるが、mouais はまさに oui でも non でもないというあいまいな表現であり、ここでの記述と一致する。

3.1.2. 返答につまった合図

(9) [注射をしてもらった後、医者に対して]

- Ca agit combien de temps ?

「どのくらい効果は続きますか？」

- Bof, vous savez... Ca dépend des individus.

(Au-delà)

「さあねえ、人によりますから。」

(10) - Tu sais ce que tu veux faire, toi, Michel, quand tu quitteras l'école ?

「ミシェルは卒業したら何をしたいと思ってるの？」

- Bof, je ne sais pas exactement...Mais.. (Camarades)

「さあ、はっきりとはわからない。でも ...」

(9) は医者と患者の会話である。患者に効果の持続時間を尋ねられたが、医者自身述べているように個人差があるため、即座に返事できず言葉に詰まっている例である。(10) はクラスメイト同士の対話であるが、同様に、将来の予定についてまだあまり考えていないため、やはり言葉につまっている例である。これらの例の bof は、尋ねられた事柄に対して、即座に返答できない、あるいは、答えがわからない、ということに対話者に合図しているように感じられる。言いよどみの合図という意味では、つなぎ語の ben や euh に言い換えることができそうである。しかし、ben や euh に比べ、bof は答えができないということを強く含意するという違いがあるように感じられる。

ところで、3.1.1.の「あいまいな返事」と3.1.2.の「返答につまった合図」は、どちらも明確な返事をしない、あるいはできない際に使用されているという点ではかなり類似している。それに対し以下の用法はやや性格を異にする。

3.1.3. 忠告を聞かない態度

(11) - Dis donc, Roger ? Il faudrait peut-être aller voir un médecin, ce n'est pas normal que tu ne manges plus, tu as dû attraper un chaud ou froid.

「どうしたの、お医者さんにみてもらったほうがいいんじゃない、もう食べないなんて変よ。きっと風邪を引いたのよ。」

- Bof ! Ce n'est rien, ça va passer. (Dans le sillage)

「まあ、なんでもないよ、すぐ治るさ。」

(12) - Il ne faut pas l'enlever, dit Xavier. Si c'est une pièce électrique importante, on risque de se retrouver en carafe.

「それとらないほうがいいよ、とグザビエは言った。もし大事な電気部品だとしたら立ち往生しちゃうよ。」

- Bof ! C'est peut-être un truc en trop, qui ne sert à rien, répond Storb. (Western)

「まあ、たぶん余分な部品だよ、何の役にも立っていない。」

これらの例の bof からは、相手が問題にしたことを深

く考えようとせず、忠告を聞こうとしない態度が感じられる。(11) は、夫がすこしかたべないので、妻が心配して医者に診てもらったほうがよい、風邪を引いたのだと忠告するが、夫はその意見をまともに受け取らないという例である。(12) も同様に、車の部品を取るべきではないという対話者に対し、たぶん余分な部品だといって対話者の忠告を聞こうとしない例である。この場合の bof は、3.1.1. のようにあいまいに返事しているとも、3.1.2. のように返答につまんでいるともいえず、すこし異なるタイプである。

3.1.4. 事態を深く考えない態度

(13) Tiens, c'est fermé. Bof, parce qu'il est 11 heures. (Ciel)

「あれ、閉まってる。まあ、11 時だからな。」

(14) Depuis son escapade à Ostende, Clémence a le sourire et se sent bien dans sa peau, sauf qu'elle a pris un petit coup sur le nez, mais bof ! c'est un détail. (Le Chien)

「オステンドに逃避してから、クレモンスは微笑んで、気楽に過ごしていた。鼻がちょっと日焼けしてしまったが、まあ小さなことだ。」

これらの例の bof には、問題となっている事態を大げさに考えない、あるいは気にしないという態度が現れている。(13) の例では、目当ての店が閉まっていたという事態、(14) の例では、鼻が日焼けしてしまったという事態がそれにあたる。これらの例の bof は、つなぎ語の bon、あるいは間投詞の tant pis に言い換えることが可能である。3.1.3. の「忠告を聞かない態度」も 3.1.4. の「事態を深く考えない態度」も、問題となっていることを議論の対象に取り上げようとする態度という意味で同じ用法とみなすことができるだろう。

3.1.5. 譲歩的な態度

(15) Je fais beaucoup de sports. Ce que j'adore, c'est le foot. Le hockey, bof, ça va, mais je déteste la natation. (Métro)

「スポーツはいろいろやっている。一番好きなのはサッカー。ホッケーはまあいい、でも水泳は大嫌い。」

(16) En hiver, il y a que les gens du quartier, ceux qui promènent leur chien. Après il y a les 12 colonnes, bof, c'est joli, mais c'est tout, (...)

「冬は、犬の散歩をしているような地元の人しかいないよ。後は 12 本の円柱があって、まあきれいだけど、それだけ、...」

(15) の例は話し手が好きなスポーツについて語っている場面である。話し手にとって、ホッケーはとても好きと言うわけではないが、嫌いというわけではない。こ

こでの bof は、譲歩すれば ça va と言える、という話し手の譲歩的な態度を表しているように思われる。(16) はある公園を紹介している例である。話し手にとってこの公園は手放して称賛できるものではない。一旦譲歩し、留保つきで c'est joli 「きれいだ」とほめ、すぐさま c'est tout 「ただそれだけである」という否定的な意見を述べている。

次は会話コーパスから採取した例である。仕事で嫌なことを尋ねられ、ルーチンワークであると答えるが、最終的には ça va と譲歩する様子が明瞭に見て取れる。

(17) [仕事で嫌なことを尋ねられルーチンワークであるという]

- Est-ce qu'il y a des choses qui vous déplaisent dans votre travail ?

「仕事で気に入らないことはありますか？」

- Oh ben, ça dépend la routine des fois tout le temps les mêmes choses qui reviennent à intervalles réguliers, alors on voudrait bien voir euh différentes ou un petit peu modifiées, mais enfin ... bof ça va . ça va quand même. (ELICOP)

「場合によりますが、ときにルーチンですね、いつも決まった間隔で同じことの繰り返し。だから、いろんな、ちょっと変わった物事を見たいんですけど、まあ、問題ない、まあいい。」

これらの例の bof は bon に言い換えることができる。bon も同じく譲歩の用法をもつからである。

まだ例を収集しつつ考察を続ける必要はあるが、以上の論から少なくとも次の二点を指摘できる。

ひとつは、bof という表現は辞書類が記述する「無関心・無気力・軽蔑」だけでなく、より幅広い主観的態度を表すことができる点である。その意味でいくつかの辞書が訳語として挙げている「ちえっ、ふん」は bof の一面しか捉えていない。本稿で扱った用法に近い訳語は「まあ」や「さあ」といったフィラーであると思われる。

それに関連するが、もう一点の指摘は bof が alors や bon、ben、enfin 等と同様、つなぎ語 (connecteur) としての側面ももち合わせているという点である。事実、すでに言及したように bof は bon や ben といった表現に言い換えることができる場合がある。また、会話コーパスを参照すると、bof が bon、ben、enfin に次ぐ頻度で使用されていることがわかる。これらの表現は、談話の流れを調整、管理する機能をもつという点から、談話標識 (ディスコースマーカー) とも呼ばれるが、bof の意味役割を解明するためにはこうした観点からの分析も視野に入れる必要があるだろう。

3.2. 形容詞的用法

以上は、辞書にも記載されている間投詞的な用法に關

する考察であった。次に、これまでに見てきた用法とは意味的にも統語的にもかなり性格を異にする用法が存在することを論証したい。以下の例がそれにあたる。

- (18) Mardi matin, il s'était pointé au départ de sa série du 200 m avec des airs de matou mal réveillé. «Fatigué», avait-il avoué. Verdict : 20" 70. Franchement bof. (Libération)
「ウサインボルトは火曜の朝、寝起きの悪い猫のような様子で、200mの予選のスタート地点に現れた。「疲れていたんだ」彼は言う。記録は20秒70。正直言ってぱっとしない。」

- (19) - Et pour toi, tout va bien ?
「君のほうは、うまくいってる？」
- Ouais, bof, quoi. (Daniel)
「うん、まあまあってとこだ。」

これらの例の bof が、これまでの用法とは異質であるとする根拠を説明する。まず、意味的に言ってこれらの bof は、概念的な意味内容を表している。その意味内容とは、pas terrible「たいしたことない」や moyen「普通」といった表現に相当する、月並みな性質である。(18)では、ウサインボルトの20秒70という記録について、(19)では、日常生活全般について、良くも悪くもなく普通である、すなわち月並みであることを表している。

またこれらの例で、発話行為副詞 franchement「正直に言って」や、説明を締めくくる表現である quoi が bof に伴っていることも注目し得る。このような表現は、具体的な意味内容があって初めて付与可能である。以上の理由から、これらの例の bof は間投詞的な用法と性格を異にするといえる。この用法の bof は概念的な意味内容をもつという意味で間投詞的ではない。対象の性質を表すということから、むしろ形容詞的な性格をもつと考えられる。bof が形容詞的な性格をもつか否かについては3.2.1.で改めて論じるが、その前にこの用法が担う「月並みな性質」の意味が顕著になるケースを二つ考察しておく。それによって、この意味が間投詞的用法の意味と明確に区別できることを示したい。

i. bof bof

bof には、bof bof という繰り返しの用法が存在する。

- (20) - A part ça, tes vacances ?
「で、バカンスはどう？」
- Bof bof jusqu'à aujourd' hui mais ça va changer dès demain matin ! (Les Vacances)
「今日まではぱっとしなかったけど、明日の朝から変わるさ！」

この例の bof bof は、休暇について、良くも悪くもない、月並みであることを述べており、表現された意味は(18)-(19)の単独の bof と同じである。なお、jusqu'à aujourd'hui「今日まで」という前置詞句が伴っている

ことも、やはり間投詞的ではないことを思わせる。

さて bof bof には、bof よりも顕著に月並みな性質の意味を感じることができる。なぜなら、bof bof は月並みな性質を表す用法に特化されているからである。単独の bof は、3.1.で見たように間投詞としても使用できるが、繰り返しの bof bof は間投詞の意味用法をもたないのである。それを明らかにするのが次の例である。

- (21) - Si on allait au ciné ce soir ?
「今夜映画に行かない？」
a. - Bof.
b. - ?? Bof bof.
(22) Comment tu trouves ce film ?
「この映画どう思う？」
- Bof bof.

(21a)の bof は間投詞的用法の「あいまいな返事」の用法であるが、これを(21b)のように bof bof に言い換えると不自然になってしまう。つまり単独の bof とは違い、bof bof はあいまいな返事の用法をもたないのである。これは「あいまいな返事」だけでなく、「返答につまんだ合図」「忠告を聞かない態度」「事態を深く考えない態度」「忠告を聞かない態度」「譲歩的な態度」といった、どの間投詞的用法も bof bof はもたない。bof bof が自然なのは、例えば(22)の映画に関する感想を聞かれたときのような、何らかの性質を述べるときに限られる。

このように、月並みな性質を表す用法に特化された表現が存在することは、それだけこの意味が他の用法の意味と異なっていることを示唆しており、両者を区別する根拠となりえる。

ii. 属詞位置での使用

もう一つのケースは次のような属詞位置での使用である。

- (23) Lire, c'est le plaisir d'apprendre des choses sur la vie et sur soi, mais les livres toujours pessimistes, c'est bof. »
「読書は、人生とか自分自身に関して学べて楽しいけど、終始悲観的な本はつまらない。」
(24) Aujourd'hui, je vous présente donc mon smoothie vitaminé (la photo est bof bof).
「ですから、今日はビタミン入りのスムージーを紹介します(写真は微妙です)」

このように bof は属詞の位置を占めることができるが、属詞位置での使用も月並みな性質を表す場合に限られる。つまり間投詞の用法では属詞で使えない。

- (25) - Si on allait au ciné ce soir ?
「今夜映画に行かない？」
a. - Bof !
b. - ?? C'est bof.
(26) - Comment tu trouves ce film ?

「この映画どう思う？」

- C'est bof.

(25a) は「あいまいな返事」用法の bof であるが、これを (25b) のように C'est bof に言い換えることはできない。属詞位置での使用も、やはり (26) の映画に関する感想を述べる時のような何かの性質が問題となる文脈に限られる。なお、C'est bof よりも C'est bof bof というほうが自然であると判断する話者もいる。その理由は、bof bof が月並みな性質を表す用法に特化されており、その分多義的な bof よりも形容詞的で、属詞位置にふさわしいと感ぜられるからであると思われる。

3.2.1. 形容詞的な性格

以上の考察から、bof が月並みな性質という意味を有し、その意味は間投詞的な用法が表す意味と異なっていることがより明らかになったと思われる。そこで、以下ではこの用法が形容詞的な性格をもつという主張を改めて行ってみたい。

その一つ目の根拠は、すでに述べた意味的な側面である。この用法の bof は「月並みな性質」という、一つの「性質 (qualité / propriété)」を表し、品質形容詞的であるといえる。実際この用法は moyen、banal、pas terrible といった他の形容詞に言い換えることができる。次に、やはりすでに述べたことだが、属詞位置で使われることも bof の形容詞的な性格を示唆するものとみなすことができる。そして、三点目は程度修飾を伴うことがあるという点である。以下の (27) では強意副詞 très 「とても」が bof を修飾している。(28) では、un peu すこしという副詞句が、(29) では、vraiment 「本当に」という副詞が bof を修飾している。

- (27) Ma famille me manque, mes amis me manquent, je suis seul ici et mon compagnon de cellule est très bof bof.

「家族や友達が恋しい、ここでは孤独で、独房仲間是非常につまらないやつだ」

- (28) Des points faibles ? L'écriture de l'auteure. J'ai adoré l'histoire, mais comme texte, c'est un peu bof. C'est très haché, cru et extrêmement répétitif.

「マイナス点？ 作者の文体だろう。物語はとてもよかったが、文章はちょっとさえない。すごく細切れで乱暴で、繰り返が多い。」

- (29) [あるホテルを評価して]
Certes pas cher, mais vraiment bof bof.

「確かに安いけど、本当にぱっとしない」

なお、程度修飾が可能であるということはこれらの bof が性質の意味を表わすという主張を支える根拠にな

るが、実際には意味的な問題だけでなく bof の統語的ステータスにも関わっているように思われる。つまり、意味的には bof が対象の性質を表わすとしても、統語的にはまだ形容詞としての地位を確立していなければ修飾を受けることは難しい。事実これらの例は新語表現の印象が強く、すでに定着した語法とは言えない。

最後に bof の形容詞的性格を示す論拠の四点目として、bof が付加形容詞的に名詞を修飾する場合があることを付け加えておく。ただしこのような使用もまだ日常的に定着しているとは言い難い。

- (30) Journée bof ! Ni bien ni pas bien.

「さえない一日だ！よくも悪くもない。」

- (31) Viennoiseries bof bof et cerises du marché en guise de petit déj'.

「朝食に、さえないデニッシュとマルシェのさくらんぼ。」

このように、統語的な面から見た形容詞的な性格は、まだその芽生えを指摘できるという程度でしかないが、意味的にはもはや確実に性質の意味を表わす品質形容詞的な性格をもつと言えるだろう。

3.2.2. 間投詞から形容詞へ

本稿の以上の主張が正しいとするならば、bof は間投詞から形容詞へと移行しつつある事例になる。これとは逆の形容詞から間投詞へと文法化する例はまれではない。例えば、chic という形容詞は「しゃれた」、より抽象的には「素敵な」に相当する性質を表すが、「やった！」という間投詞としても使用される。また、bon も「良い」に相当する形容詞だが、つなぎ語の用法も併せもつ。このように、形容詞から間投詞へ移行するということは、内容語から機能語へと向かっているということであり、文法化の一般的な方向性に合致している。一方、bof のように間投詞から形容詞に移行するなら、それは機能語から内容語へという方向であり、文法化とは逆の現象、すなわち語彙化に相当する。

間投詞から形容詞への移行に近い例としては Putain! 「ちくしょう！」という悪態言葉の一用法を挙げることができる。putain は de を伴って、putain de という形で名詞を修飾する用法 (putain de film 最低の映画) をもつ。また、同じく悪態言葉である Nom de dieu ! も名詞修飾の用法を獲得している¹。さらに、山本 (2011) で取り上げた情意形容詞は、統語的には形容詞でありながら多分に間投詞的な性格を有しており、bof の形容詞的用法はこうした現象と関連づけることができるように思われる。このように、形容詞と間投詞という文法範疇には強いつながりを認めることができるのである。

なお、少し異なるが関連する言語現象として Benveniste

¹ Nom de dieu ! に関しては Schnedecker (2010) を参照されたい。

(1966 [1958]) が言及する *verbe délocutif* が想起される。*verbe délocutif* とは *locution* から派生した動詞のことであり、例えばラテン語の動詞 *salutare* « *saluer* » は、Benveniste によれば語としての *salus* からではなく、*locution* である *Salus !* から派生した語であるという。これは間投詞から動詞が派生した事例だが *bof* が提起する問題と無関係ではないだろう。

3.2.3. 他の間投詞

他の間投詞の中にも形容詞的な性質を獲得しているものは存在するだろうか。いくつかの間投詞を形容詞的に使用できるかネイティブに判断してもらったが、どれも不自然ということである。

- (32) a. Youpi ! 「やった」 (満足な気持ち)
b. *C'est youpi.
- (33) a. Zut ! 「ちえっ」 (残念な気持ち)
b. *C'est zut.
- (34) a. Ouf ! 「ほっ」 (安堵の気持ち)
b. *C'est ouf.
- (35) a. Beurk ! 「おえっ」 (嫌悪感)
b. *C'est beurk.

ただし、*C'est beurk.* はブログなどで容易に実例を見つけることができ、「まずい」「ひどい」というような性質の意味で使用されているように思える。

しかしながら、実例の豊富さ、ネイティブの反応からいっても確実に形容詞的な性格を獲得しているのは *bof* のみであるといえよう。

3.2.4. いかにして月並みな性質の意味を獲得したか

最後に、いかにして *bof* が月並みな性質の意味を獲得したかという問題について述べておきたい。一つの可能性としては一種の語用論的強化が考えられる。例えば (36) は、(19) と同じ月並みな性質を表す *bof* の例である。

- (36) - Et pour toi, tout va bien ?
「君のほうは、うまくいってる？」
- Ouais, bof, quoi. (=19)
「うん、まあまあってとこだ。」
- (37) - Bof ...
「うーん」

(36) の同じ問いに対して、(37) のように間投詞的に *Bof...* と答えることもできる。その場合、調子が良いとも悪いとも言えないために、あいまいに返事しているという 3.1.1. の用法、もしくは返答につまったことを合図する 3.1.2. の用法とみなすことができる。重要な点は、間投詞的な *bof* の使用にもやはり、良くも悪くもない、普通だということが強く含意されることである。すなわち、そうした文脈的な解釈が *bof* の意味に取り込まれたと考えることができる。

4. おわりに

以上、これまで考察の対象にとりあげられることのなかった *bof* という間投詞について考察を行った。まず辞書等で記述されている間投詞的な用法の考察を行い、それから間投詞的な用法と異なる形容詞的な用法が存在することを主張した。間投詞的な用法はその意味を把握するのが困難であり、用例を収集しつつさらに考察を続ける必要がある。また他のディスコースマーカー (*bon*, *ben* 等) との比較を行うことで *bof* の固有性が一層明らかになるものと思われる。

bof が間投詞から形容詞へと移行しているという主張もさらに検討する余地はあるが、間投詞と形容詞の関連性は興味深い問題である。一般に間投詞が表すのは、話し手の情意や態度であり、これは話し手側に属する性質とってよい。一方形容詞が表す性質とは、対象物の側に属する性質である。この両者が同じ言語表現で表されるという事実は、言語における主体と客体の問題を考えるうえでも重要なのではないだろうか。

<参考文献>

- Bally, Ch. (1944) *Linguistique générale et linguistique française*, Berne, Francke.
- Benveniste, E. (1966 [1958]) « Les verbes délocutifs » in Benveniste, E., *Problème de linguistique générale* 1, Paris, Gallimard, 277-285.
- Hansen, M. (1995), « Marqueurs métadiscursifs en français parlé : l'exemple de bon et de ben », *Le Français moderne*, 63, 1, 20-41.
- Kleiber, G. (2006), « Sémiotique de l'interjection », *Langages*, 161, 9-23.
- Schnedecker, C. (2010), « L'adjectif sacré entre modalité d'énonciation et modalité d'énoncé. Une drôle d'enclosure ! », in J. Goes et E. Moline (eds.), *L'adjectif hors de sa catégorie*, 265-287, Arras, Artois Presse Université.
- 山本大地 (2011), 「情意形容詞 *fichu* について」『フランス語学研究』45, 37-51.

<出典>

- Balligand, C., *Pourquoi la méchanceté ? Selon Spinoza*, Sartre et Girard, De Boeck, 2002. (Pourquoi)
- Bonviller, Ch., *Ciel ! Mon mari veut naviguer...*, L'Ancre de Marine, 2006. (Ciel)
- Coe, J., *Camarades*, Nelson Thornes, 1996. (Camarades)
- Gary, R., *Au-delà de cette limite votre ticket n'est plus valable*, Gallimard, 1975. (Au-delà)

McNab, R., Métro, Heinemann, 1999. (Métro)
Michad, J., Western Movie, Le Manuscrit, 2004.
(Western)
Pascale B, Les Vacances de Simon, Le Manuscrit, 2006.
(Les Vacances)
Ramseier, M. W., Pulpa Negra, Nemo, 2008. (Pulpa)
Tourtourat, F., Le Chien noir, Mon petit, 2010. (Le
Chien)

Van Geyseghem, S., Daniel Spidmer et le signe du
destin, Publibook, 2005. (Daniel)
Videau, J.-P., Dans le sillage des gabares, La
Découverte, 2006. (Dans le sillage)
Etude Linguistique de la Communication Parlée
(ELICOP) , <http://bach.arts.kuleuven.be/elicop>.
(ELICOP)
Libération, <http://www.liberation.fr>, (Libération)

